

東日本大震災発生以降、華嚴宗大本山東大寺は鶴岡八幡宮（鎌倉市）との合同法要を東北各地で毎年行っています。去年は宮城県多賀城市より数年前からの依頼を受けて、4月から6月末まで「東大寺と東北」と題して東北歴史博物館で展覧会を開催しました。多賀城には奈良時代に今でいう政府の出張所があり、同じく宮城県涌谷町からは産出された金で大仏が塗金されたというご縁もあります。

さて、東大寺二月堂修二会（十一面悔過法要）は天平勝宝4年（752）、東大寺初代別当良弁の弟子実忠じつちゆうによりに始められ、今年で1268回目を迎えます。江戸時代末までの法要人員は20人前後。現在に比べて長時間に及んだため僧が途中で交替する必要がありました。今でこそ大きな法要として有名ですが、本来は「仏生会（釈尊の誕生日）」や「御齋会（聖武天皇御忌）」などに比べると寺内で重きを置かれていませんでした。創建当初から行われていた十二大会だいじふにも修二会は含まれません。なお、その真の目的は松明をともしたり水を汲んだりすることではなく、十一面観音の前での悔過（懺悔すること）であることをお心に留めておいて下さい。

奈良時代、六宗（三論宗・成実宗・法相宗・俱舎宗・華嚴宗・律宗）を学ぶ僧たちはまず大安寺で学んだあと、東大寺に入りました。寺内各所ではそれぞれの宗の法要が営まれ、僧たちは互いに行き来し、高僧を招くなどして研鑽を深めました。聖武天皇が全国に国分寺や国分尼寺を建立したのは、学び終えた僧たちを各地に派遣して文化やまちづくりの手法を津々浦々に広め、ひいては国家の安寧や人々の幸福を願ったためです。

そもそも古代の各寺院では悔過法要が行われていました。法要は整備された伽藍と僧、指導する人、準備する人、材料、その伽藍で法要が必要な教学的理由が揃って初めて成立するものです。必要な材料は海路、河川を利用して全国から調達されました。これには現地の土地所有者の理解が必要です。何ごととも運営・維持していくには人の力が欠かせないということです。

では、当の僧侶たちはどのような精神で修二会に臨んだのでしょうか。法会勤修の目的には自利行と利他行の二面性があり、その形式は読経、講経、悔過、論義、説戒に大別されます。極寒のなか昼夜2週間にわたる本行はほぼ不眠不休です。非常に厳しい規律があり、顔の向きや所作などがこと細かに定められています。動きが変わる際もなんの合図もありません。所作を誤った僧は江戸時代以前であれば、きびしい処分が課されました。声明を覚えるには並々ならぬ労苦が伴ううえ、間違いは許されません。初めて参籠する時は初夜の本節のみ、3年目で神名帳の読み上げが許され、5年目になってようやく過去帳にたどり着きます。

東大寺の前身は聖武天皇の夭折した皇太子のために建てられた金鍾山房。のちに作られた諸堂伽藍に対して二月堂周辺は「上院」と呼ばれ、ここには聖武天皇の信頼厚い初代別当の良弁ろうべんがいました。良弁は審祥に「華嚴経」の講説を依頼、その後、聖武天皇が勅を下して「華嚴経」の興隆が図られました。聖武天皇は「華嚴経」を通じて国民にわかりやすく釈尊の教えを広めたかったのです。

鎌倉初期まで修二会は華嚴宗に属する僧だけの法要であり、法会を支える人々の寄進と熱意のみで成り立っていました。ところが平安後期（12世紀後半）になると二月堂は「南無観寺」と呼ばれるようになり、一般参拝者が増え始めました。そして人々にとって理解しやすく、変化に富んだ所作や声明が魅力的な修二会は次第に存在感を増し始めました。庶民の熱心な信仰や経済的な支えが無ければ、今日までの継続はとうてい不可能だったでしょう。二月堂の須弥壇しゅみだんに飾り付けられる色鮮やかなツバキの造花や餅には人々の幸福と豊かな実りへの願いが込められています。